
白い闇

曾根悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い闇

【Nコード】

N4325F

【作者名】

曾根悠

【あらすじ】

外界から閉ざされた町で起こる奇妙な連続殺人事件。常識を覆す状況で殺された住民たち。一夜にして消えた建物、消えていく人々、同じ夜に行われた十一の殺人。最後の章で待っているのは意外な結末とどんでん返し。本格長編サスペンスミステリー。

序章

序章

町は奇妙で悪質な雰囲気に囲まれていた。空気は悪意に満ちていた。家は全て崩壊して今にも塵と化しそうで、濃い紅色に染まった空からは銀色に輝いた月光が注いでいた。薄い霧が発生し、町中を包んでいく。時間と共に窓は次々と曇っていった。今にもこの小さな洋風な町は闇に飲み込まれそうで、町を位置するこの島は海に飲み込まれそうだ。大陸から随分と離れた孤島が一島沈んだだけで、気づく人がいるだろうか。いないだろう。

町は荒れていたが環境は十分整っていた。田舎のように住む人々は数少なかった。人口は多くて五百人程度で、老人が多かった。島にはこの町を含め、四つの町があった。町の間には村や山、湖などが境に入り分けていた。

この町では闇という言葉が意味するのは暗黒で、夜で、恐怖で、死だった。

光が意味するのは生で、太陽で、心だった。

町は光と闇の境目で、混沌だった。

その町に二人の若者が大通りで静かに足を運ばせていた。二人の顔は凍りついたように、死んだように全く動いていなかった。瞬きすらしていないのではないだろうか。二人は手を繋ぎ、マネキンのようにゆっくりと暗闇に覆われた道を歩いていた。

背の高いほうは黒い長髪をツインテールに結んだ、非力そうな娘だった。形の良い唇からは煙草の煙のような濃い白い息が時折吐かれていた。青いジーンズに手編みのセーターを着ていた。歳は十代後半だろう。

娘の冷たい手のひらが掴んでいたのは小さな子供の手だった。その少年は短パンに厚い上着を着ていた。身長は百センチぐらいで、顔立ちは娘のものそっくりだった。

「ナオキ、焦らないでゆっくり」

ナオキと呼ばれた少年が疲れてきたのに気づき、娘は呟いた。ナオキは返事を返さなかったが、かわりに小さく頷いた。

二組の足音が町中に反響した。

二人は闇からの視線を感じた。

恐怖を感じた。

気配を察知した。

殺気を感じた。

死んだ。

序章（後書き）

あらすじを読んで、期待して読んだ方々すみません。この文章を書いている時点では序章しか書いてません。そのせいでどこにでもあるような話に。第一章からは一つの章を長くしていくつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4325f/>

白い闇

2010年12月14日14時30分発行